近畿の底ぢから

消毒ジェル フル回転

手に優しく ウイルス退治

ピカソ美化学研究所（兵庫）

「ピカソ化粧品」と聞いて、懐かしいと感じる人も多いだろう。兵庫県西宮市の「ピカソ美化学研究所」は、創業85年になる化粧品や医薬部外品の老舗メーカーだ。現在はピカソブランドの化粧品は販売しておらず、他社の商品の開発や製造を手がけている。新型コロナウイルスの感染が広まってからは、消毒用品を急ピッチで製造しており、ウイルスとの戦いの一端を担う。

5月上旬、西宮市西宮浜にある同社工場を訪ねると、真新しい機械が目についた。国の補助金を受け、4月に導入した液体じゅうてん機だ。

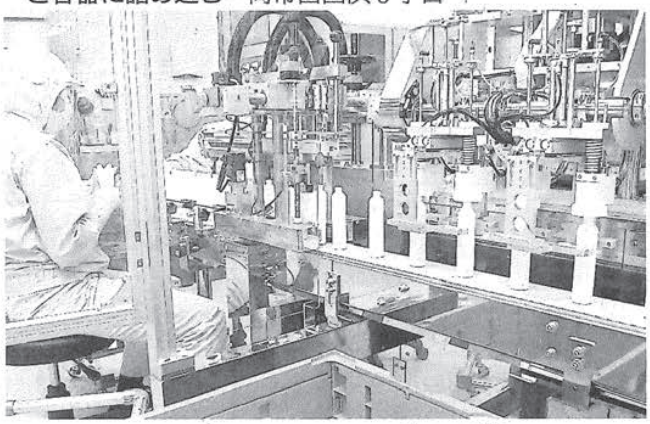
八木伸夫社長。手前に並ぶのは消毒用のハンドジェル＝兵庫県西宮市池田町

急ピッチで作っていたのは、持ち運びしやすいハンディータイプの消毒用ハンドジェル。機械が次々と容器にジェルを注入し、従業員たちは検品したり、箱に詰め込んだりしていた。

1時間に約2500本作ることができるという。56社から受注した1300万本を6月末までに納品しなくてはならず、機械は大型連休中も休み無く稼働した。

八木伸夫社長(63)は「1本でも多く世の中に出回れば、それだけ予防に使ってもらえる」と話す。

新たに導入された機械が、消毒用のジェルを次々と容器に詰め込む＝同市西宮浜3丁目



同社は1935年、大阪市で創業した。八木社長の祖父である創業者が、「ピカソ」のブランドで化粧水や洗顔クリームの販売を始めた。50年代には、スティック状ファンデーションなど国内では新しい商品を次々と売り出した。

ところが、60年代後半になると、化粧品市場は様々なブランドであふれるように。消費者のニーズは多様化し、安全性への意識も高まった。ピカソのブランドは撤退し、培った技術や製造ノウハウを生かして、他社製品の企画や開発から生産までを請け負う裏方にまわった。

「ピカソ」の名前は表に出なくなったが、現在は大手通販業者、研究所がない化粧品会社など約300社の顧客を持ち、スキンケアやメイクアップ商品など、全ての化粧品を手がける。

3月、県内初の新型コロナウイルス感染者が地元の西宮市で確認された。同社は消毒用ハンドジェルを新たに製作し、市に3千本、兵庫県に5千本を寄贈した。ジェルなので手になじみやすく、化粧品の会社らしく保湿成分を配合し、手荒れをしにくくしたものだ。これが好評で、得意先から商品化の要望も届き、大量の受注につながった。

新型コロナの感染拡大を機に、同社は他にも感染対策商品の開発を進めているという。抗菌性のある植物などを使った歯磨き粉づくりや、殺菌効果のあるハンドクリームやマウスウォッシュの開発などだ。八木社長は「持っている技術を生かして、社会に価値ある商品を供給するのが使命だと思っています」と、今後を見据えていた。

（松永和彦）

ピカソ美化学研究所　「美しく化する素」という言葉から社名を「ピカソ」とした。現在、兵庫県西宮市、横浜市、タイ・バンコク、中国・上海に生産工場を持つ。従業員は約1千人。創業者がデザインしたという、まつ毛が長い女性の横顔が会社のロゴマーク。